

教職大学院 Newsletter

No. 2^β

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻

2008.04.27

教職開発専攻の発足にあたって

教職開発専攻長 寺岡 英男

いよいよ4月から教職大学院・教職開発専攻が発足しました。これに至るまで、県教育委員会をはじめとする県内の教育機関、学校、大学、学部の皆さんにご理解と多大なご協力をお寄せいただいたことに心から感謝を申し上げます。

教職大学院は、今日の社会的な要請と、既存の教員養成大学院制度の見直しの中で、「力量ある教員の養成のためのモデルを制度的に提示することにより、より効果的な教員養成のための取組を促す」期待をもってつくられた、新たな教師教育の枠組みです。歴史的に見ても教師を専門職（professional）と捉えた教師教育の大学院制度は日本では初めてであり、画期的なことです。3月の「教師教育改革のための福井会議」で基調提案された文科省の新田さんの言葉を借りれば、教職大学院創設の目的は何よりも、良質の「教員養成プログラム」を提供することにあります。教員養成プログラムの策定については、これまで教育職員免許法改正によって改善が図られてきましたが、教職大学院の創設によって、大学の側に、教員養成教育の改善とそ

のための大学改革を図るよう委ねるという転換がなされたといえます。まさに教員養成教育を担う当事者としての、大学の主体的力量が問われることとなります。

その大学側の責務ということで言えば、福井大学では、生涯学習機関としての大学の役割や学習観の転換という新たな動向をふまえて、従来の「伝達」「体験」モデルから学校改革の実践・共同研究を通じての生涯にわたる力量形成モデルへの転換をめざして、新しい教員養成教育の方

向性とそのための学部・大学院の改革のデザインを提起し、その具体化に取り組んできました。その理念的な提起が2000年からの3度にわたる学部見解であり、具体化の典型が夜間主・学校改革実践研究コースの設置でした。しかし、これらのデザインとその具体化は、これまでの学部・大学院の枠組みという縛りがありました。その意味で、今回の教職大学院という枠組みの創設は、そうした縛りから解放し私たちのモデルをいっそう展開していくために、非常に意味のある基盤が与えられたものと受け止めています。

では、どうして新しい枠組みが必要で、私たちは教職開発専攻をつくらうとするのか。最後に改めてそのことを確認しておきたいと思います。21世紀のこれからの社会に生きるための子どもたちに求められる能力（リテラシー）とは何かを捉え直すこと、そしてそうした能力を培うように学校教育を改革していくこと、さらにそれを担う教師の専門的・実践的な力を問い直しながら、大学の教員養成教育の改革に取り組むこと。子どもの学びの改革、学校の改革、大学の教師教育改革は互いに連関しあい、しかもその核となるのが学校です。それが、私たちの教職開発専攻のコンセプト—学校拠点に教師の協働実践力を培う—の所以（ゆえん）であるわけです。

私たちはそれをミッションとして受け止めながら、それこそ学校と行政と大学が協働して、教職大学院の創設という歴史的な事業とともに踏み出して行きたいと思います。

内容

教職開発専攻の発足にあたって(1)

21世紀の中学校をひらく/至民中学校 (2)

上海師範大学訪問記(7)

Staff 紹介(9)

若い世代の自己紹介 (12)

教育実践と教育改革を考えるために(19)

Make it Public

Critique it

Pass it on

Built upon it

Ann Lieberman, 2005.03

21 世紀の中学校をひらく / 至民中学校

教職大学院の拠点校の一つ至民中学校。新しいデザインの校舎で、新しい学びを実現する取り組みが始まっています。教職大学院客員準教授でもある至民中研究主任の牧田先生に、動き出した新しい至民中のいまを伝える報告をお願いします。

異学年型教科センター方式の新至民中始動

牧田秀昭

(福井大学教職大学院客員準教授・至民中学校教諭)

4月1日、いよいよ新至民中学校が移転開校した。全国に類を見ない異学年型教科センター方式として生まれ変わった本校は、校舎の造りだけでなく、教育理念やシステムについても設計業者、大学、福井市教委、地域・保護者、生徒等、関係機関と協議を重ねて準備をしてきており、その点でも希有な例であると言えよう。

簡単に教育内容に関わる学校改革のあらましを紹介すると、スタートは3年前にさかのぼる。当時、全国の中学校の典型であるかのような生徒指導中心であった至民中学校で、「授業づくり」を学校づくりの中核に据える取組を開始した。教科の壁を越えて授業公開を繰り返し、研究紀要も実践のひとまとまりを全員が書くように変更した。2年前からは、内外から注目を集めた70分授業と20分ドリルタイム（昨年度から「RE タイム」に名称変更）を開始する。探究と習得のサイクルを構築するためのものである。またノーチャイムや全校一斉朝読書など、主体的に、かつ落ち着いて学習に集中できるシステムを整えていった。昨年度は開校を目前に控え、新しい学び方に関する手引き書「Shimin Study Life（至民中での学び方）」と施設運用マニュアルの編集、カリキュラムの更新等を行ってきた。また、全員が教科を越えた授業研究を進めるだけでなく学校運営にも直接参画できるような組織に改編し、クラスター制（異学年での活動）の試行も行ってきた。この3年間での学校全体の変貌の様子は、最近の研究紀要4冊を見比べれば明らかである。

さらに、福井市のパイロットスクールとしての役割を担う。3年前に福井市教育委員会によって福井市中学校教育研究協議会が立ち上げられ、至民中を会場として新しい中学校教育の在り方について研究協議を続けてきた。今後も継続され、実践研究の経過を発信していくことが義務づけられている。

このような背景の下、教職大学院の拠点校となった。昨

年度1年間はこのテストケースとして研究部（本校では企画開発委員会と呼ぶ）の活動に大学の先生方に関わって頂いた。本校職員との人間関係もできあがり、自然な形で全体研究に対して刺激的で先進的なアドバイスをもらえるようになってきたと感じている。

さて新校舎についてであるが、教科センター方式として教科教室が整備されていることに加えて特徴的なことは、ホーム（学級の教室）が確保されていることである。他の教科センター方式の例では、教科教室を間借りしていたり、ロッカールームのようなスペースだけであったりするが、テーブル席ではあるものの各自の座席が確保され、読書や給食などができるようになっている。ホームとしてのまとまりは、学習、生活の基盤となるもので大変重要である。さらに3～4の異学年ホームが社数理英のエリア横に隣接しており、4つのまとまり（クラスター）が出来上がっている。「異学年型」と呼ばれるのはこの所以である。ホームの仕切りは移動式のロッカーだけで、他のホームでの出来事が筒抜けである。少し狭いこともあって利用について心配されたが、アットホームで閉塞感も思ったより無く、今のところ順調な滑り出しと言えよう。それぞれのクラスターには、国語は赤、社会は青、数学は黄、理科は緑、英語は紫といったイメージカラーが決められていて、エリアや教室のプレートも色分けされている。なぜその色なのか想像を巡らせてほしい。3年生を中心にそれぞれが自治的活動を展開し、どんどん特徴が出てきて自分のクラスターカラーに愛着を持てるようになることを期待したい。まさに4つの小さい学校が林立する連邦国家のようなものである。

ホーム同様教科教室も壁は最小限に抑えられ、ガラス張りか仕切りのない状態であり、教室内だけでなく教科エリアの中央に位置するオープンスペースを使って授業が行われる。イメージはある程度していたものの、いざスター

トするとこの構造の特異さに圧倒される。四角く閉ざされた空間で、全員が黒板に向かって整然と並んで教師の講義を聴き入るといった光景はここ至民中では消えようとしている。

研究テーマは「学びと生活の融合ー異学年型教科センター方式を運営するー」と決定した。生徒指導と学習指導を切り離すのではなく、学びの視点を生活に、生活の視点を学びに生かしていく。この校舎での生活がまさに研究テーマそのものである。校舎を移動していく途中でも興味関心

のチャンネルが切り替わり、知らず知らずのうちにその教科の世界に引き込まれていくと理想的である。教室移動の時点で授業は始まっている。ちなみに数学が最も出遅れている状態で、今後教科エリアをどのように運営するか、この企画も楽しみである。教師の力量が様々な面で問われる学校であると言えよう。教職大学院の拠点校であるメリットを意識しながら、生徒同様、様々なコミュニケーションとコラボレーションを構築してテーマ解明に向かう。ワクワク、ドキドキのスタートとなった。

福井新聞社提供 2008. 4. 20

＋ (3) 福井ワイド 2008年(平成20年)4月20日(日曜日) 永昌

至民中「教科センター」授業 開放的な教室に感心 福井 保護者ら800人見学

福井市南江守町に新築移転した至民中で十九日、「教科センター方式」による授業が公開された。生徒が授業ごとに教室を移動する同市初の取り組み。間仕切りのない教室で積極的に学ぶ姿を保護者らが見守った。各クラスのホームルームや給食に使う教室「ホーム」は異学年同士が近くに配置され、クラスターと呼ばれる縦割りグループをつくったのも特徴。生徒の移動と交流を念頭に置き、教室と廊下の間仕切りが極力省かれている。山下忠五郎校長は学ぶために足を運ぶことで生徒の主体性を養うのが教科センターの狙いと話す。



住民らが見守る中、開放的な教室で授業を受ける生徒＝19日、福井市至民中

この日は全校生徒約三百七十人が午前中、計三校時二校時七十分の授業に臨んだ。数学の教室では生徒が班に分かれ、問題の解き方をいろいろな角度から考える授業を公開。教師と生徒が自由な雰囲気の中で意見を交わした。八百人を超す保護者やOB、地域住民が来校。生徒の活発な声があちこちから聞こえるフロアを興味深げに見て回った。クラスター長の一人、福井中央LCケヤキ6本寄贈運動公園に植樹

福井中央ライオネスクラブは十八日、福井市安田町の同市総合運動公園にケヤキの木六本を寄贈し、植樹式を行った。写真。植樹式には会員三十三人や市関係者らが参加。南良子会長(右)は福井市順化一丁目IIが「ケヤキの木が大きくなることを願い、楽しみに見守りたい」とあいさつ。木の目録を市建設部の滝花正巳副理事に手渡した。滝花副理事は「緑を守り、育て

至民中 新校舎が完成 オープンスペース教室に地域交流棟『日刊福井』 2008. 3.29

先進的な教育環境 児童ら『楽しみ』

福井市渚（ふち）四丁目から南江守町に移転した至民中学校が完成し二十八日、新校舎でしゅん工式が開かれた。市内で初めて導入される「教科センター方式」の学校は、壁を取り払ったオープンスペースの教室や、地域の人々と生徒が触れ合う「地域交流棟」など、先進的な教育環境を整えている。（藤井雄次）

教科センター方式は、国語や数学、英語などすべての科目で専用の教室を設け、生徒が授業ごとに教室を移動する。教室と廊下の間仕切りを減らし、移動がスムーズにできるようになっている。

新校舎は、鉄筋コンクリート二階建てで延べ約八千二十三平方メートル。ガラス窓をふんだんに使い十分な採光がある設計で、床や棚などは木目を使った温かな雰囲気。事業費は約二十億円。

式では神事後、生徒玄関前で東村新一市長らがテープカット。体育館での式典には、地元の社南地区自治会関係者らも含め約二百人が出席した。東村市長は「新しい学校が地域の人々から絶大な支援を得るよう願う」とあいさつ。同校生徒会長の吉川大介君（14）が「学校と地域が身近になることを期待し、至民中の新たな伝統をつくっていききたい」と決意を述べた。校舎を見学した吉川君は、自分たちの学校という実感が「新しすぎてまだない」と明るく笑いながら「ここで学べるのが楽しみ」と新学期からの学業に胸を膨らませていた。（中日新聞社許諾済）

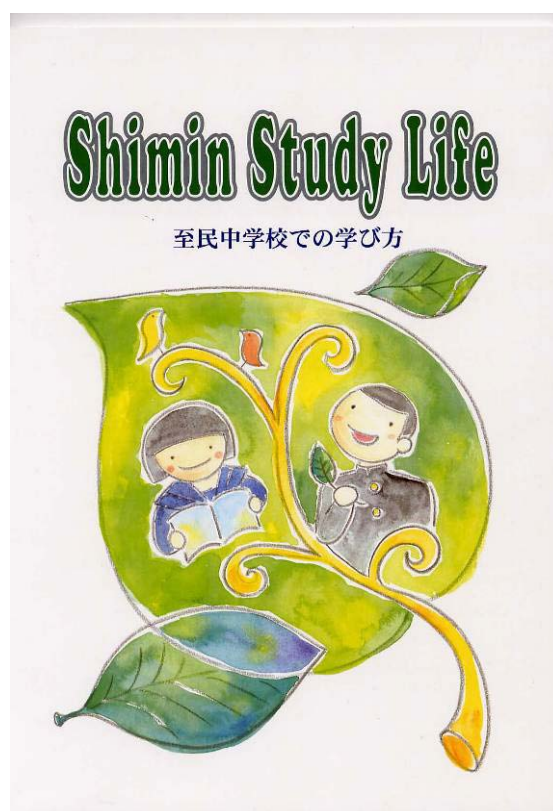
学校と連携を図るため、地域に開放するエリア



先輩後輩のつながりを重視した「教科センター方式」を取り入れたエリア



至民中学での学び方
2008. 4



「新時代の学び」始動

福井新聞社提供 2008.4.12

（第3種郵便物認可） 永富 三斗 奈新

クラスの拠点となる「ホーム」。生徒はこの場所に荷物を置き、授業がある教室に向かう＝福井市の至民中



◆校舎内に教科エリア
新校舎（鉄筋コンクリート二階建て）の正面玄関を入るとまず「二階吹き抜けの「葉っぱエリア」の開放感に驚かされる。学校らしからぬ畳敷きのステージや広いラン

福井市の至民中の新校舎が南江守町に完成し、七日に始業式がある。木の葉をイメージしたという曲線的な建物の外観もさることながら、中身はもってユニークだ。生徒が授業ごとに教室を移動する福井市初の「教科センター」方式学年縦割りの「クラスター」なる単位で送る学校生活…。市教委が中学教育を見直そうと研究協議会を立ち上げ三年、「新しい時代の中学校」を市民に実感させる取り組みがいよいよ本格的に動き出す。

がひと足先に導入しているが、福井市教委の新道正芳指導主事は「教えられるのを待つのでなく、自ら学びとる姿勢につながる」と利点を強調。また、例えば理科の授業なら、どの学年のクラスも同じエリアで授業を受けることになり、「教室の学びの跡や授業の様子を見ることで、学習に連続

かれ、それぞれに「教科のひろば」という空間と、それを取り巻く三〇四の授業教室がある。教室と言っても、簡単なガラスの引き戸があるだけで、「ひろば」と一体的な空間だ。ひろばには教材や書籍が配置され、同じエリア内に、クラスごとの拠点「ホーム」も三〇四つずつある。

こうしたユニークな設計は、「教科センター方式」に対応するため。各クラスの生徒はホームを拠点としながら、大学のように授業に合わせて教室を移動する。教科センターは、県内では丸岡南中（坂井市）

教科センター方式

ユニーク設計 至民中（福井）

学年縦割りで学校生活 クラスター制

1階の平面図



「新時代の学び」始動

先輩後輩つながり重視

性も生まれる」（同指導主事）と解説する。

◆授業以外にも縦割りさらに、先輩後輩のつながりを、授業以外の生活面でも強く意識している点も、同校の大きな特徴だ。同一エリア内のホーム（クラス）では「クラスター（集まり、集団の意味）」と呼ばれる学年縦割りのグループが、自分たちで日々のルーティンを決め、学校の準備や職場体験学習なども一緒にやる。

こうした盛りだくさんの取り組みに、山下忠五郎校長は「変化の激しい時代、子どもたちが生きていくために、前例にこだわらず新しい中学教育に挑戦したい」と意気込んでいる。

たい」と説明する。

クラスター制は、昨年度から旧校舎でも試験的に導入しており「下級生には上級生の存在が刺激になり、上級生も指導のやりがいを感じていただ」と話す。

◆住民との交流授業も注目点はほかにも多い。校舎全体の三分の一近くを占める「葉っぱエリア」は、地域住民への開放を念頭に置いたスペース。音楽室や木工金工室もあり、生徒と地域住民との交流授業も想定されている。

さらに同校は、初めて校区外からの生徒も受け入れ、初年度は十三人が域外から通学する。また福井大教職大学院の拠点校にもなっており、教員のレベルアップの面からも大きな期待が寄せられている。

(7) 経済・総合 2008年(平成20年)4月27日(日曜日)

学校像変える2校の試み

「今の学校はこんなにすごいのか」
「私たちの時代とは大違い」―四月から移転新築した福井市の至民中で先ごろ、授業と校舎の一般公開が行われ、見学した地域住民らが驚きの声を上げた。開放感あふれる校舎や体育館、理科や英語など教科ごとのエリア、曲線を多用した廊下や教室、ガラス張りの校長室…など従来の四角ばった中学校舎のイメージを一新させる、新しい学校が誕生した。

丸みを帯びた校舎

実は、校舎がこのようなデザインになったのは理由がある。▽授業に合わせ生徒が教室を移動する(教科センター方式)▽異学年の学級を隣接させ、授業以外の生活は縦割りの集団(クラスター)で行うという「異学年型教科センター方式」を採用したためだ。校舎に曲線や丸みが

今、中学教育が面白い

多いのは、生徒が移動しやすいように、また縦割りで行動しやすいように設計段階から考えられている。学校側は「待ちではなく生徒が自ら動くことで子どもたちの自主性を重んじる。自分で課題を見つけたり、問題を自ら解決する力を身につける」と、学校としての「一体感が出て校風が生まれる」という。



ため」とその狙いを解説する。

全国で珍しい教科センター

同じ教科センター方式を採用し、二年前に開校した坂井市の新設校丸岡南中の取り組みもユニーク。授業

のたびに生徒が教室を動くことや、「スクエア」と呼ばれる縦割りの制の採用などと同じ。開放的な校舎内は

まるで大学キャンパスのよう。三百人を超す全校生徒が同じランチルームで給食を取る光景は圧巻である。開校準備に携わった教諭は「それまで強過ぎた学年中心を改め、普段の学校生活で先輩後輩の関係を築こ

ム制」だ。授業を行うクラスとは別に学年、在籍する学科が混じった集団「ホーム」があり、清掃や昼食、生徒会活動、学校祭、キャンプなどの教科外活動全般はそのホームで行った。

学制改革翌年の昭和二十四(一九四九)年から始められ、議論を残しながらも全国でただ一校の取り組みとして四十五年間も続いた。

進学率や受験に影響を与え「時代にあっていない」という理由で、十四年前の一九九四(平成六)年に、地域に惜しまれながら廃止された

が、地元の教育者、鳥居史郎氏が説いたホームルーム制の基本理念「異質なものを対する理解と寛容」は、グローバル化した今の時代にも十分通用する理念と言える。



縦割りの導入では、丸岡南、至民の両校関係者は「若狭高は参考になっていない」としており、実際に高校と中学の違いもあって、まったく同じ制度とは言い難いだろう。

しかし、若者のコミュニケーション能力の低下や人間力の弱まりが指摘される今、「異質なもの」とどう接するかは教育においても大きな課題の一つで、「縦割的教育」が今再び脚光を浴びているのも、こうした背景があるかもしれない。

いずれにせよ、学校を取り巻く方針や環境が目まぐるしく変わる時代。至民、丸岡南両中の試みを中学教育の在り方を見直す、思い切った冒険として受け止め、その先行きを注目していきたい。

(加藤佳紀)

上海師範大学訪問記

教師教育をめぐる福井大学と上海師範大学との連携が進んでいます。この連携プロジェクトは教師教育改革の世界的な展開とも結びついています。上海を訪れた長谷川副専攻長の報告です。

長谷川 義治

(教職開発専攻副専攻長)

3月30日～4月3日の間、上海師範大学との交流協定の継続確認ということで、黒木学部長に随行して上海市を訪問した。黒木学部長と私は小松から、寺岡先生は名古屋から、上海に向かう。上海浦東国際空港で私たちを出迎えてくれたのは、通訳の趙さん。空港から市街地へは、趙さんの友達が運転する自動車で移動したが、目の前を走行していたトラックが急に車線変更し、急停車。上海人の手荒い歓迎に冷や汗がたり。

予定の時間を1時間ほどオーバーして、白先生と合流。久しぶりの再会を楽しむ。



上海師範大学は、1954年設立の上海市管轄下の重点大学とのこと。元々は教員養成大学であるが、現在では、教育学院や数理信息学院、対外漢語学院など19の学院(学部のこと)を擁する総合大学。学生数は約4万人で、日本からの留学生も100人ほどいるとのこと。学生は全員、大学内の学生寮で生活しており、大学内にはパン屋や軽食屋、郵便局などもある。また、上海市の小中学校の教師の70%、同中学校長の70%が上海師範大学の卒業生という名門の大学。

日程1日目、国際交流処と教育学院を訪問。国際交流処では、交換留学生など交流の状況について意見交換と留学生中心(センターのこと)の見学。特に、黒木学部長からは、①福井大学が教職大学院を開設したこともあり、大学院スタッフや院生の交流も今年からスタートしたい、②協

定書は2005年から4年間になっているが、自動的な延長を希望したいなどを説明する。華処長からは、①上海師範大学としても延長に異論はなく、来年夏ごろ更新したい、②上海師範大学は、上海市教育委員会の二重管理の上海市



教師教育基地で、上海市の小中学校の教員研修をしているので、今後、教員交流も希望するなどを説明される。

教育学院では、陳学院長の案内で施設を見学し、その後に意見交換。特に、陳学院長からは、上海市の人口は約2,000万人で、その教育委員会のバックアップで大学内に上海市教師教育基地を建て、教育機器などの設備・備品を充実させ、校長研修など教師教育に取り組んでいるとの説明があった。なお、同基地には、海外の小中学校で使用されている教科書が展示されていたが、日本の教科書は極端に少なかったため、何とか収集して贈呈できたらと思った。

また、項副校長(副学長のこと)からは、上海市の小中学校長の研修を福井でもやれないかとの提案があった。

2日目、数理信息学院と対外漢語学院を表敬訪問。黒木学部長からは、教員や学生の交流充実を依頼された。

3日目、黒木学部長は一日中ホ



テルで原稿の執筆。私は、趙さんと豫園や新天地の見学及びショッピング。



上海の印象は、光と影。豊さと貧しさが同居している。街中は多少埃っぽいところもあるが、予想以上にきれい

である。2008 年に北京オリンピックが開催され、また、2010 年の上海万博の開催を控え、街中の至る所でビルの建設が行われている。

今回、上海市小中学校の現場を見ることはできなかったが、通訳の趙さんの話によると、エリートを目指した教育が行われているとのこと。ちなみに、大学もランク付けされていて、中国全土における上海師範大学のランキングは 90 番台とのこと。また、偶然にも、ある中学校の下校風景を見ることができた。保護者が校門まで迎えに来ていて、鞆も重たそうで、カートで引っ張ったり、保護者に持ってもらったりしている。

地下鉄に乗った時、若い女性がさっと立って、黒木学部長に席を譲る。「さすがに道德の国だ」と思った。しかし、一方、交通マナーは最悪。自転車やバイクも多く、歩行者も赤信号で横断歩道を渡ったり、横断歩道のない所を渡ったり。自動車などは、歩行者が横断中でもクラクションを鳴らしながら突っ込んでくる。とにかく、怖かった。

物価は安く、朝食は 7 元 (約 100 円) もあれば十分。ただし、スターバックスのコーヒーは 1 杯 25 元 (約 380 円) で日本とほぼ同じ。趙さんの案内で、大型スーパーマーケットでの買い物も経験する。

施設視察の時間は余り取れなかった。まずは魯迅公園。宿泊ホテルの目の前にあり、魯迅記念館があるということで、早朝に散歩する。公園では、実に大勢の人が、太極拳、



気功、ダンスなど、グループごとに音楽に合わせて運動している。途中、人だかりができ

ていたののでぞいて見ると、トランプや麻雀を楽しんでいる。公園が地域コミュニティになっている。

外灘は、租界時代に建てられたヨーロッパ風の建築物が多く、何とも言えない風情があり、対岸のテレビ塔や高層ビル群には上海の経済的パワーも感じた。

新天地は、レンガの壁や石門を配した、フランス租界の街並みを再現したレトロ調の観光スポット。琉璃工芸品の店やスターバックスの喫茶店もある。

豫園は、明代に造られた個人の庭園で、名称は「豫悦老親 (老親を喜ばせる)」の句にちなんでいるとのこと。様々な堂楼、巨石・奇石、池、築山などが壁や回廊で仕切りながら複雑に配置されていて、まるで迷路状態。

囲碁を楽しむ。囲碁は、別名、手談とも言う。一種のコミュニケーションである。通訳の趙さんに「上海で囲碁をしたい」と話したところ、趙さんは、項副校長に相談。項副校長の格別の配慮で、楊さんを紹介される。彼は、楊浦区の小学校教員であるが、現在、上海師範大学大学院で、小学校における囲碁教育活動の影響を研究しており、囲碁指導者としてのキャリアも長いとのこと。副校長の応接室で、片言の英語を用いながら、丁寧な指導を受けた。

後日談であるが、楊さんからメールがあり、修士論文の最終稿を送ってもらった。中国語で書かれた論文であるので、直接に読むことができないが、時間がかかっても翻訳して読んでみたいと思っている。



Staff 紹介②

教職大学院にはさまざまな分野で実践と研究を重ねてきているメンバーが集まっています。そして教職大学院の専任教員ばかりでなく、多様な視点と位置からこの教職大学院を支えています。そうしたスタッフそれぞれの固有の実践と研究のあゆみ、教職大学院に寄せる期待、これからの展望について語ってもらうコーナー。その第二回です。

松本 健一 まつきけんいち

初めて福井駅に降り立ったとき、“雪おこし”が鳴りだしていました。昭和56年のことです。それから27年、多くの方と知り合いになり、つくづく福井が狭くなったと感じるこの頃です。

ときどき専門を尋ねられることがあります。発達心理学、教育心理学、教育相談、臨床心理学、カウンセリング、幼児心理学、児童心理学、障害児教育、障害福祉、授業研究、生活科・総合的な学習の研究など、どれも問われたら「そうです」と応えたことのある研究分野です。ちょっと節操がないように思われるかもしれません。しかし、どれも臨床研究ないしは実践研究という視点からの取り組みであり、私の中ではそんなに違わない。むしろ様々に取り組む中で、同類の現象について角度を変えながら捉え直すための機会を与えられたと考えています。

言い換えますと、子ども・授業・教師・家族、さらには、時々の同僚関係・学校風土・社会・教育内容等が織りなす重層的でかつ多次元的な相互性、その中で生じている出来事が研究対象です。そして、その出来事が当該者の生命活動に滞りを生じさせたり、各自の生命活動の拡大を阻止したりするようなことがあるならば、どのように改善すればよいのか、滑らかに生命活動を拡大するには何をすればよいか等について一緒に考え、精度の高い自己調整が実現できるようにはたらきかけること、それが自分の生業だと思っています。

ちょっと角張った言い方をしましたが、誰もが日々当たり前のようにやっていることです。人は人とかわることで、嬉しくなったり、悲しくなったり、悩んだり、考えたりしながら、少しでも自己を成長する方向に調整しようとしています。このことを研究の対象にしているわけです。私は現在、教職大学院を担当していますから、その中でも特に教師が自らを巡る相互性について、子どもと自身の成長の視座で整理できるようになることが研究課題です。

ところで、教師の成長にかかわって、この日々の当たり前でちょっぴり複雑に絡まり合っている教育現象を、その

まま研究として取り上げることは、これまであまりなかったように思います。たとえば、教師の働きかけを外から客観的に眺めて理論を構築したり、実験的に条件を制御して理論を論じたりすることはありました。あるいは、教師自身が半生を振り返って実践をライフヒストリーとして著すことはありました。つまり、理論と実践のどちらかのフレームで、学校で起きていることを論じてきたわけです。

しかし、それでは複雑に絡み合った相互性を、しかも子どもや教師の成長を基軸に編み直していく力にはならないように思います。日々変化する成長発達を基軸に、実践と理論を省察によって結び、たえず実際の中で再構成するようなフレームが必要になります。さて、この視座を持って教育実践を眺めてみると、これまでの実践の理論化や理論の実践化のフレームでは目に入らなかった限りなく豊かな世界が見えてきました。悲しいかな人間の目は、準拠枠に支配されています。同じ現象を見ている、なぜこれまで気づかなかったのかと思うことが、枠を変えただけで新鮮に見えてくるものです。

福井の教職大学院は、大学院・学校・実践・理論・学習観・同僚等のフレームが従来のそれとは異なります。今、私たちスタッフは、眼鏡を変えることで見えてきた豊かな世界に夢中になっています。おそらく10年たって振り返った時、日本の教師教育（「教師教育」というと高飛車に響くかもしれませんが、教育の本質が指導性ではなく相互性にあると思うと「教師教育」という言葉の響きも変わってきましょう。）のターニングポイントは、2008年の福井にあったと思う日が来るのではないかと夢想している次第です。8000人の先生！一緒に日本の新しい教育を歩んでみませんか。





上野 澄子 うえの すみこ

昨年春、福井大学に着任した上野澄子です。教職大学院の専任教員として、全力を注いでいきたいと思えます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

わたしは、中学校教諭を経て、20年あまり小学校で勤務してきました。専門は音楽で、長く学校音楽を担当してきました。趣味としては、モーツァルトに代表される本場のイタリアオペラを鑑賞することが大好きです。

しかし、学校音楽には、クラシック以外のさまざまな要素を取り入れなくてはなりません。発声、読譜、器楽などの基礎基本を押さえながら、楽しい音楽作りを進める必要があります。朝に帰りにと、校舎内に響く子ども達の歌声を聞きながら、自分の学校音楽の運営が、順調であるかどうか確かめてきました。一教諭が、学校全体に自分の思いを伝え、また先生方に協力していただくには、工夫と努力が必要です。この意味で、スクールリーダー養成コースの先生方は、同じ思いをされているのではないのでしょうか。

下の写真は、小学校3年生の担任をしていたときに行った、総合的な学習の時間のひとコマです。子ども達が大人の方と楽しそうにおはぎを作っている場面です。一見、地域の方々や祖父母世代とのふれあいがテーマのように見えますが、実際には、各教科のさまざまな学習が総合的にかかわっています。



まず、おはぎのあんやきなこの材料は、子ども達が学級園で小豆や大豆から育てたものです。これは、理科の学習である「草花を育てよう」の学習が基になっています。他には、餅米や砂糖などの材料を計量する際、算数の「重さしらべ」の単元で、初めて学んだ秤を使用しました。

ここでのテーマは、おじいちゃんやおばあちゃんの子どもの時代の生活を体験することでした。飽食の時代に生きる子ども達にとって、何十年か前には、おはぎがごちそうだったのを知ることは驚きの事実でした。あわせて、昔の遊びや手作業の洗濯、脱穀・精米、石臼を回しながらのきなこづくりなど、社会の「米をつくる」、「かわってきた人々のくらし」の単元と並行して進め、実体験を伴う学習ができました。これらは、子ども達が課題追究した結果、やってみたいという願いから実行に移されたものです。

さらに国語では、あまきみこさんの「ちいちゃんのかげおくり」という戦時中の空襲体験の物語を読み進めていたので、この題材のオペレッタに取り組むことになりました。自分たちの学校や家の近くも空襲に遭っていたことを、地域のお年寄りの話から聞く機会を得ました・

このように、小学校の総合的な学習は、学級担任がほとんどの教科を担当する利点を生かし、教科と総合との往還が可能です。教科担任制である中学・高校でもそういう実践ができるよう、福井県教育研究所で取り組んできました。

福井大学でのこの一年は、自分の立ち位置を暗中模索する日々でした。今何をすべきか焦り、大学特有の言葉や文化に慣れるのに必死でした。教職専門性開発コースの皆さんも、同様の不安があったら、遠慮なく相談してください。教職大学院のスタートに当たり、昨今はインターンシップの基盤づくりにも力を入れています。学校現場で培った財産を、福井の教育のために役立てられることは、この上ない喜びです。研究者の先生方と協働しながら、実務家だからこそ、その経験を生かせることに誇りを持って、「理論と実践との融合（往還）」に力を尽くす所存です。

石井 恭子

いしい きょうこ



平成 19 年 9 月 1 日に福井大学に着任いたしました石井恭子です。8 月までは東京の小学校で教員をしておりました。生まれも育ちも東京で、一度も訪れたことのなかった福井には初めて移り住み、「住みやすさ No.1」の福井ライフを楽しんでおります。

福井大学のことを初めて聞いたのは、現場から離れて大学院で学んでいた 2003 年のことです。生涯学習のゼミで、福井大学で学ぶ現職教員大学院生の修士論文を読むことになり「福井大学では、教員が学校から離れて大学院に通うのではなく、大学の先生が学校に来てくれるんだよ。仕事をしながら大学院生として学べるんだ。」と聞きました。いつもと同じように授業をして学級指導をして、普通に校務分掌をしながら、実践をもとに修士論文が書けるなんて、夢のような話だと感じました。

これが、今の福井大学教職大学院の原型でした。現在そのスタッフとしてここにいられることを、とても幸せなご縁だと思っています。教職大学院のスタッフには、生涯教育、発達心理、教育方法、教育史、特別支援教育など様々な専門の教員と、社会、数学、音楽、家庭科など教科の専門を持つ実務家教員が集まっています。このバラエティに富んだメンバーがそれぞれの専門を生かしながら教職大学院の開設に向けて力を合わせてきた半年は、たくさんの刺激を受け多くを学んだ初めての経験でした。

小学校では、低学年の担任が多かったため、生活科の中でおもちゃ作りや空気遊び、こま遊びなど、子どもたちが身の回りの自然現象や環境を使って遊ぶ活動を盛んにやっては公開研究会で発表してきました。もともと物理出身でもあったので、そんな実践を高校の物理教員の勉強会で発表させて頂く機会もあり、次第に小中高の科学的な概念形成やカリキュラムへの関心が高まってきました。海外の実践やカリキュラムを調べたり、探究的な学習のことを勉強したりしながら、現在に至っています。

数年前に、小・中・高・大学の物理の女性教員が集まり、**Lady Cats** という実験集団を結成しました。物理教育の学会で、簡単な材料で物理の本質が学べるおもちゃづくりのワークショップをするようになり、海外の先生たちとともに、楽しく物理が学べる活動や教材の交流を始めています。どこの国でも、小中高大通じて、科学を学ぶ一番根底のところに、不思議やおもしろさを感じたり、あれどうなっているの？と考えたりすることを大事にしているとわかりました。夢中になって遊んだり大自然の中でゆったり過ごしたりすることはそれ自体が楽しく豊かなものですが、科学的な考え方や科学への関心を支える大切な体験だと考えています。学校の授業と同時に、誰もが自然や科学を身近に感じられるような社会をつくっていくための様々な活動にも、福井の先生方とともに取り組んでいきたいと思っています。

いよいよ 34 名の院生の先生方とともに、長期実践研究が始まりました。これまでの経験を少しでも生かしながら、多くの先生方の実践とともに学び、実務家教員として力を尽くしたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



南米やアフリカの先生に指ハブを教える（モロッコで）

21 世紀の教育を担う 若い世代の自己紹介

教職開発コースのストレートマスターのインターンシップが始まりました。一年間にわたってじっくり拠点校で教師としての実践力を培う取り組みです。6 人のメンバーの自己紹介です。

高山 星奈 たかやま ほしな

学部時代、知識を得るための授業が多く、「知識はいつでもこれじゃ子どもの前で授業ができる気がしない、もっと実践力をつけた教師になりたい」と思い教職大学院入学を希望しました。

私は富山大学出身で、学部時代は教育学を専攻していました。卒論ではオルタナティブ教育（主にフリースクールなどの学校教育以外の教育）を取り上げ、オルタナティブ教育が注目を集めている背景から学校教育の制度的な課題を見つめました。つまり、教育の大枠に目を向けていました。そのため、「実践力をつけたい」という気持ちと同じくらい「今度は学校現場、実践に一步近づいて、学校教育現場そのものの課題を見つめたい」という気持ちもあります。インターンで現場に入ることも、そこで見つけた課題をしっかりと振り返る（省察する）こともできるという教職大学院のカリキュラムは、私にとってとても魅力的です。

インターンでは福井大学教育地域科学部附属小学校に入らせていただくことになりました。附属小学校では「つながり合って育つ」が研究テーマになっています。私は最初に聞いた時、子ども同士のつながりだと思いました。しかし、子どもたちは学校でいろいろなもの、いろいろなこととつながる機会を持っています。子ども同士はもちろん、先生と、教材と、過去の自分とのつながりという視点からも見るができます。また、「つながる」という行為は

見えるものではなく、実感として感じるものではないかと思います。何と何のつながりなのか、何をもってつながったとするのか、先生方がどう判断し、つながり合うことをどのように考えておられるのかを、インターン

を通して学んでいきたいです。また授業実践においては、「子どもをみる」ことが中心に置かれています。ある先生の「授業は下手でもいいから、子どもをしっかりみよう」という言葉がとても印象に残っています。経験が浅いことも関係しているとは思いますが、私は「子どもをみる」＝授業において子どもがどのように成長したか、どのような子どもの姿を目指すかよりも、授業の「How to」、つまり、質問の仕方や授業方法などに目が向いてしまいます。自分が授業をする立場になったとき、おそらく授業を授業らしく（？）することを中心と考えてしまうと思います。「子どもをみる」とはどういうことか、先生方がどのように子どもたちを見、授業を行っているかということも先生方の授業や普段の接し方から学んでいきたいです。



黒川 清貴 くろかわ きよたか

シップや大学でのカンファレンス、現職の先生方と行うラウンドテーブルなどの活動を通して、授業力や生徒理解力、生徒指導力などの、教師に必要とされている様々な資質や能力を身につけたいと思ったからです。

長期インターンシップの実習先である至民中学校での日々は非常に楽しく、70分授業や教科センター方式、異学年型クラスターなど目新しいものばかりです。また、至民中学校が行っている、問題解決型学習や協働的な学びを目指す授業にとっても興味を持っています。というのは、問題解決学習が学力低下の原因の一つであるということの本で読んだことがあったからです。そのため、至民中学校の授業が一体どのように行われていくのか非常に楽しみ



こんにちは。4月から教職大学院教職専門性開発コース（ストレートマスター）に入学しました、黒川清貴です。専門教科は数学です。週に3日間、長期インターンシップで福井市至民中学校へ行っています。

私が教職大学院に進学しようと思った理由は、拠点校での長期インターン

であり、授業の参観を通して問題解決型学習の良さや改善すべき点を感じていたらと考えています。

また、異学年型クラスターが3年生の生徒のリーダー性を高めたり、1,2年生の主体性や協同性の成長にどのような影響を与えたりするのが非常に楽しみです。1年間という長期インターンシップの利点を活かし、生徒の成長にもしっかり目を向けていきたいと思います。

至民中学校では、この他にも多くの取り組みがあります。これらの取り組みは、実践と理解の一体化をテーマに行っており、毎日が研究活動であり実践活動です。このような

全国に先駆けとなる学校で、インターンシップの実習をできることが非常に嬉しく、自分がさらに成長できるチャンスだと感じています。

在学中は、学ぶ姿勢を忘れず、何でもまずはやってみようというチャレンジ精神を大切に、毎日励んでいきたいと思います。一日一日を大切にし、一つ一つの努力と経験を積み上げていく2年間を送りたいです。そして卒業後は自信を持って教壇に立てるように、今を大切にしていきたいです。

青柳 宏治 あおやぎ こうじ

私は、教職大学院教職開発専攻の学生として、至民中学校において1年間の長期インターンシップを行なっています。

私がこの教職大学院に入学しようと考えようになったきっかけは、教育実習などを経験していく中で自分自身の教員としての力量不足を感じたことでした。そもそも大学の教員養成課程で学ぶことは理論が中心であり、実践の経験を積むのはわずか数週間の教育実習だけでした。その短期間で教員として必要な実践力を身につけることは難しく、理論ばかりで実践力が伴っていない自分自身への不満を強く感じました。そこでこの教職大学院に入学することを決めました。

この教職大学院の最大の特徴は、1年間という長期間学校現場で学べるインターンシップだと思います。このインターンシップは、従来の教育実習とは全く異なり、年度始めから年度終わりまで学校で実習を行なうので、学校の1年間の流れを体験できるだけでなく、学校経営や学級経営といったことまで学ぶことができます。さらには1年間を通して子どもとともに学校生活を送ることで、子どもの内

面を読み取る力もつくと思います。

さらにもう一つの特徴は、単に学校現場で学ぶだけではなく、現場で感じた課題や疑問点を振り返り、省察する時間が確保されていることだと思います。自らの実践を振り返り、省察することによって問題点・課題点を明確にし、その解決策を考えていくことは、教員として絶対に必要なことだと思います。教職大学院の2年間ではそれを学ぶことができます。

私は、この教職大学院で、「目」を養いたいと思います。その「目」とは、子どもの内面を見る目であり、自分自身の実践を見直す目でもあります。常に、子どもに目を向け、常に自らの実践の問題点を見つけ改善し、より良い教育を模索していく。そういうことのできる教員になるための資質をこの2年間で学び取りたいと思います。



山口 敦央 やまぐち あつお

学部では、数学サブコースに所属し、数学教育について学んできました。授業では専門的知識を身につけ、実習では実践的授業作りを経験するにつれて、自分の目指す教師像がはっきりしたものになってきたように思います。また、教育地域科学部の授業の一環として行われている、フレンドシップ事業（探求ネットワーク）には3年間携わってきました。そこでは子どもの成長を肌で感じることができ、学校での総合学習や縦割

り活動に対しての視野が広がるとともに、活動を作り上げていく力を身につけることができたように思います。

4年生になったとき、教職大学院の話を耳にしました。既存の大学院ではできない実践的なカリキュラムで学ぶことができると知り、第1期生という不安もありましたが、教師としての力をもっと付けたいと思い、挑戦してみようと思いました。実習での経験だけでは自分の教師としての力を十分に見出せなかったように思うので、1年間の長期インターンシップはとても魅力的でした。

現在、教職大学院に入学し、インターンとして附属中学校に週3日間通っています。年度の初めから職員会議や研究会に参加させていただいたのは貴重な経験となりました。各生徒会活動などでは、生徒の口から校訓である「自主協同」が何度も出てきました。生徒たち自身が、自分た

ちで学校を創り上げていくという自覚を持って活動している姿に驚きました。また、新1年生のクラスに入り、学級活動や総合的な学習（学年プロジェクト）を中心にクラスと学年を見させていただいています。そこでの教師の働きかけは、自分がまだ身に付けていない部分が多いので勉強になります。教科の授業はまだ始まったばかりであり参観できていませんが、これから学んでいきたいと思います。木曜には拠点校での経験を大学に持ち寄って、他の院生とカンファレンスを行っています。そこでは、それぞれ



私は、福井大学教育地域科学部保健体育教育コースを卒業し、保健体育の教員を目指しています。専門競技はバスケットボールです。高校2年生の時に、全国高校総体バスケットボール競技で全国優勝を経験することが

でき、現在も社会人クラブチームや福井県国体選手などを通してバスケットボールに精進しています。

これまで大学では、専門である体育の知識や技能の習得を始め、体育の授業づくりなど保健体育に関する専門的な内容を色々学んできました。そして、実践を通して学ぶ大学院ができることを知り、進学を決意し、この教職大学院の一期生になることができました。現在、福井大学教育地域科学部附属小学校で週3日インターンシップをさせて頂き、残り2日は大学でゼミやカンファレンスなどを通して勉強しています。この教職大学院で、私は次のようなことを学び、研究していきたいと考えています。

1つ目は、子どもたちが保健体育の授業を通して、どの

の学んできたことや悩みなど、何でもみんなと話し合うことができ、全員で学び合い高め合っているのだと実感することができます。

まだ始まったばかりの大学院生活ですが、今経験していることが少しずつ確実に教師としての力の糧になっているのが分かります。これから2年間で積み上げていくものが、教師になったときの財産になるよう、まずこのインターンシップを実りのあるものにしていきたいと思います。

長田 陽佑

おさだ ようすけ

ように成長していくのか、特に保健体育という特殊性の中で、子どもたちの学ぶ姿から私も学んでいきたいと思います。

2つ目は、保健体育の授業の中にどのような要素が加われば、学び合うコミュニティとしての学級作りにつながる授業を実現できるかを、実践と省察の中から研究していきたいと思います。

このように、まだまだ抽象的で流動的ですが、方向性としては私の興味のある授業づくりに重点を置いて考えていきたいと思っています。

教職大学院という新しいシステムが始まったばかりで、これからどうなっていくのか最初は不安もありましたが、日に日に不安は期待へと変わりつつあります。4月のインターンシップでは、「子どもたちや先生方と積極的にコミュニケーションをとっていくこと」「新学年が始まり、最初の学級づくりをどうしていくかを学ぶ」という2つの目標を立てて活動しています。

教職大学院という新しい試みの中で、一期生としての自覚を持ち、実践を通してこれからの教員に必要な力量を身に付けていきたいと思います。そして、2年後には自信をもって教壇にたてるような教員になれるよう努力してまいります。

田村 晃紀

たむら あきのり

ストレートマスターとして広島大学教育学部より本大学院へ入学しました、田村です。専門は小学校と社会科です。

実践に勝る教訓はない、大学にいた頃、浅はかではありますが、私はそのように考えていました。なので、従来からあったような「研究」としての大学院へ行くという進路は、私の頭には浮かびませんでした。もし採用試験に落ちたならば講師として現場に出ようと考えていましたし、そこでの経験が正採用までの良いステップになるだろうとも考えていました。しかし「教職大学院」という新しいシ

ステムと出会い、自分の行動次第では、講師とは別の形で経験を積めるという可能性に惹かれ、ここで2年間頑張ってみたくて考えるに到りました。

四月から福井市の豊小学校にイン



ターン生として通っていますが、来年度の3月まで、1年間学校に身を置くということで、児童ともじっくり関わっていけると感じています。また、学級経営や授業始めに際して、ある時はそれを客観的に観察し、ある時はその中に入って実際に行動するなかで、そこでの先生方の技術や信念などに間近に触れられることを大変意義深く感じています。豊小学校の、人と人との話し合いやつながりを重視する姿勢、そこでの先生方の技を盗めるだけ盗んで、この1年間のインターンシップを有意義なものにしたいと考

藤川 洋平 ふじかわ ようへい

学部の時とは全く違う生活習慣に戸惑いながらも4月から長期インターンシップとして福井大学附属中学校に赴いている。専門教科は数学で、卒業論文では「算数・数学の力をつけるための教材研究」と題し、教材教具作りを中心に研究を進めていた。現在は2年B組に入り、担任の高橋先生や数学主任の大正先生のご指導を受けている。

学部時代には『探求ネットワーク』という活動を2年間行っていた。この活動は福井市内の小学生を対象に料理やキャンプ、人形劇など9つのジャンルで1年間継続した活動を行い、子どもたちの成長を見ていくというものである。学生スタッフが全ての企画運営を行うのではなく、子ども主体の活動を目指し、子どもたちがやりたい活動を自分たちの手で創っていくという活動である。その中で子どもたちが活動を行いやすい環境設定を考え、ケースバイケースでの助言や声かけ、指示を行っていた。

附属中では「主題―探究―表現」で構成されているプロジェクト型の学習が行われている。この学習の授業は螺旋的に繰り返され、徐々に主題の核心に迫っていくというものである。場面ごとに、『発意―構想―構築―遂行・表現―省察』が繰り返されていくこの形は探求ネットワークで活動してきた1年間のサイクルに類似しており、学部で学んできたことがこれからのインターンシップに活かすこ

えています。

私の研究テーマに関してですが、まだはっきりとしたものはできていません。大学院に入るまでは、働くことや社会自体への関心など「子供のキャリア意識」について興味がありました。それは今も変わっていませんが、まずは小学校の実態をよく知ることから始めて、それを踏まえた上で、自分なりの色を出した主題を見つけていきたいと考えています。

とができたらと考えている。

インターンシップを行って、生徒との活動や新たなことを学ぶという楽しみな気持ちがある一方、不安なこともいくつかある。その中でも一番大きいものは教育実践研究についてだ。附属中学校は今



年度、Ⅷ期研究主題として『学びを拓く』を掲げ研究を行っている。会議では様々な生徒の様子が挙げられ、そのことについて激しい論議が交わされている。このような実践研究は自分にとって初めてで不安や戸惑いがあるが、とても興味深い。これから生徒たちの成長の様子を見逃さないようにしながら、進んで研究に参加していけるように努力したい。

教職大学院の1期生として名に恥じないよう2年間を充実したものにし、教職についた際には必要な即戦力と言われるよう教師力を培っていききたいと思う。

木内彩乃 きうち あやの



私は、福井大学の障害児教育コースで4年間、教育の基礎や専門的な知識を学びました。その中で、大学3年時に行なった1ヶ月間の教育実習が自分の中でとても心に残りました。現場の先生方は、

児童・生徒一人ひとりをしっかりと受け止め、細かく発達段階を把握し、子どもの将来の姿を見据えながら愛情を持ってかわっておられました。そんな先生方を見て、「専門家ってカッコいいなあ」としみじみと感じたのを覚えています。それと同時に、「私も特別支援教育のプロになりたい！もっと子どものことを理解できるようになりたい！」と強く思い、教職大学院の1期生として入学しました。

大学院では、週に3回インターンとして現場の実習に行ったり、それを大学に持ち帰って仲間たちと話し合ったり考えを深めたりという勉強をしています。私にとっては、な

んといっても、1年間という長いスパンをかけて教育現場でじっくりと子どもや先生方の姿を観察・分析できることがとても魅力的な活動です。1歩引いた目線から観察することによって、「こんなときこの先生はこういう風に声をかけるのか」とか「あの子どもはどうして急に泣き出してしまったのだろう」などというように、自分なりにゆっくりと考えることができるからです。毎日記録をまとめて、自分の考えを自分の言葉で整理していくという活動が続けていくと、1年間でとても大きな力になっていくだろうと感じています。

また、ストレートマスターの他の8人と大学の先生方とのゼミでも有意義な時間を過ごしています。自分の感じたことを他の人に伝えることで気づくこともあるし、新しい

意見を聞いたりすることもできます。先生方は本当にきめ細かいご指導をしてくださり、「私はまだまだ勉強不足だなあ」と感じているところです。ストレートマスターの仲間8人とは、最近になって思っていることを素直に言い合えたり、お互いに意見交換が活発にできるようになったりしてきました。これから大学院生活がますます楽しく、内容の濃い時間になっていくのだろうと思っています。

そういうわけで、私は今やる気満々なのです。たくさん叱ってもらいたいし、先生方の技や知識をどんどん盗んで、憧れだった「専門家」に少しでも近づいていきたいと思っています。この恵まれた環境で学べる今と仲間を大事にして、2年間でがんばりたいと思います。よろしくお願いします。

鈴木 章史 すずき あきふみ

今、私は教職大学院1期生として附属小学校の職員室でキーボードを叩いています。昨年の今頃では全く考えていなかったことです。昨年は噂でしか聞いていなかった教職大学院。今この大学院に私が在籍していることが不思議でなりません。

もともと、小学校の頃から教員というものに憧れを持っていました。母が先生をしているということが大きく影響しているのかもしれませんが、他の職に就こうと深く考えたことはあまりありませんでした。大学進学も教育大学にしか興味は無く、私の今までの短い人生は教育についてずっと考えてきたのではないかと思います。

大学では臨床教育科学コースというところに在籍し、主に発達障害のことを学んできました。大学在籍中に就学前の教育や支援について興味を持ち、卒業論文では、就学前の発達障害児の支援として、保健センターでの支援の援助や、直接保育園に訪問して経過を観察していきました。

そして私はこれからもっと長い人生を教育に捧げたいと思っています。その人生を捧げる前の最後の段階としてこの教職大学院に入学を決めました。私は大学での教育実習で関わった幼稚園児が今年度附属小学校に入学してく

ることをいい機会として、幼稚園の保育・教育と小学校の教育とがどのような違いや差があり、実際子どもらがどう関わり乗り切っていくのかを観察してみたいと思いました。そしてそのためにももう一度幼稚園に1年間に入り、幼稚園と小学校のサイクルを並行して学んでいこうと考えました。

週に2日ずつしか入れないので、1つの学校に関わる時間は他のインターン生よりはずっと少なくなってしまうと思います。しかし、中途半端なものには絶対したくないと思っていますし、逆に2つの学校園に入れることを貴重な体験と珍しい存在としてがんばっていききたいと思っています。ご迷惑をいっぱいかけていくと思いますが、何卒よろしくお願いします。



教職大学院記事ファイル

教育力向上へ 34 人決意

福井大学 教職大学院で開講式

福井新聞社提供 2008. 4. 6

教職大学院 34 人が入学福井大学で開講式

朝日新聞社提供 2008. 4. 6

2008年)4月6日(日曜日) 福井ワイド (2) +

教育力向上へ34人決意

福井大教職大学院で開講式

教育現場の中核を担う中堅教員や実践的な指導力を備えた新人教員を養成する福井大の教職大学院が新たに開設され、五性開講コースには十五日文京キャンパスで開講式が行われた。一期生三十四人が教育技術の向上へ決意を新たにした。

中堅教員が対象の「スクールリーダー養成コース」に四十五歳前後の十

九人、福井大など教育関係学部からの進学者や小中学校の講師ら新人教員を受け入れる「教職専門性開発コース」には十五人が入学した。

大学院と協力する「拠点校」「連携校」に県内二十一カ所を選定。院生が勤める学校に専任教員が出勤し、出前方式で、授業の進め方やカリキュラム編成について事例研究を進めていく。

履修科目は「カリキュラムと授業」「子どもの成長発達支援」「コミュニケーションとしての学校」の三系統。通年の実習のほか、冬期の集中講座などのカリキュラムが組まれている。修学は原則二年だが、一年での修了もできる。



教育技術の向上へ、34人が決意を新たに
した福井大教職大学院の開講式＝5日、
福井市の文京キャンパス

開講式では、梅澤章男
教育学研究科長が「教職
大学院はよりよい学校づ

くりに向けた教師教育の
切り札。積極的に研さん
を積んでほしい」とあい
さつ。院生たちは履修方
法やカリキュラムの説明
を受けた。講義は十日か
ら始まる。

福井大教育地域科学部
から進学した長田陽佑さ
ん(三三)は「これからの時
代に必要な教育技術を実
践で身につけたい」と意欲
を高めた様子。同市至民
中の高村佑司教諭(四七)は
「今までの自分の取り組
みを見つめ直すきっかけ
にしたい」と話していた。

教職大学院 34人が入学

福井大で開講式

福井大学大学院に新設され
た教育学研究科教職開発専攻
(教職大学院)の開講式が5
日、同大文京キャンパス(福
井市文京3丁目)であった。
今年度、現職教職員ら34人
が入学。組織マネジメントな
どを学ぶスクールリーダー養
成、若い世代の中核教員を育
てる教職専門性開発の2コー
スに分かれて学ぶ。小・中学

校を現場にした実践実習が特
徴で、修業年限は原則2年。
修士論文はなく、報告書の作
成、発表が課せられる。
式では梅澤章男・同大学院
教育学研究科長が「教職大学
院は日本の教師教育の重要な
試み」とあいさつした。

教育実践と教育改革を考えるために (2)

組織能力の経営論

学び続ける企業のベスト・プラクティス

DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー編集部・編訳

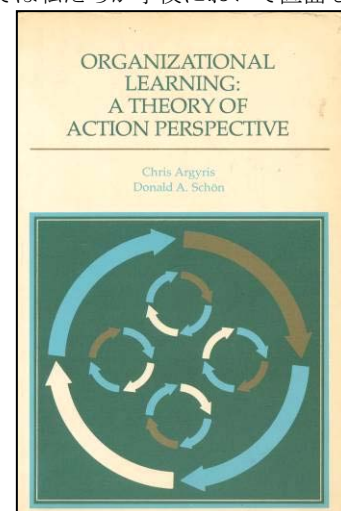
ダイヤモンド社,2007.7



「日本では、「学習」という言葉がとかく矮小化された意味にとらえられ、スキルやノウハウの修得に終始しがちです。小集団活動として社員が自主的に学習するケースもありますが、その多くは与えられた環境下での最適化の模索にとどまっているのが現状ではないでしょうか。本来の学習とは、環境の変化に対応して、新たな知識、技術、行動、思考、態度、価値観、世界観、理想をみずから獲得したり創出したりすることです。その際、価値ある知識とは、個人の真摯な洞察や直観を、組織全体で有効利用するプロセスから生成されるのです。」

アメリカを代表するビジネス・スクールの一つ、ハーバード・ビジネス・スクールの出版局から発行されている雑誌 (Harvard Business Review) に掲載された組織学習に関わる論稿を再編集した論文集。その「まえがき」に、冒頭の言葉が記されている。企業の最前線で「学習」のあり方が問われていること、そして、そこでは私たちが学校において直面している学びの転換とまったく重なる課題への果敢な挑戦が進められていることを、この論集は伝えてくれている。

この論集に、もっとも多い3編の論文が収められているクリス・アージリスは、ドナルド・ショーンとの共著『組織学習』Organizational Learning, 1978 (右の写真) によって、組織における学習の転換に問いをひらいたこの分野のパイオニアとして知られている。この新しいアプローチを開いた著書『組織学習』には、その研究の起点となった経験が記されている。当時ハーバードの大学院の教育学研究科に属していたアージリスが、ショーンとともに携わったボストンの学校マネジメントに関わるプロジェクトがそれである。その後、企業における組織学習、ナレッジ・マネジメントに関わる研究の原点となったこの著書が、地域の学校改革への取り組み、現職の学校教員との協働の取り組みの経験を起点としていることを、私たちは記憶に止めておくべきだろう。そして、ドナルド・ショーンの研究と実践がデューイの探究の理論、その認識論研究から出発していることも。組織学習の理論の系譜、その源流を探り、そしてまたあらためてその歴



史的展開の脈絡をたどり直すならば、18世紀を起点とする近代教育の企図を受けデューイとミードたちがシカゴ大学の小さな附属小学校を拠点に歩みを始めた探究としての学習への実践と研究の展開を引き継ぎながら、学校に止まらず世界的な企業組織の改革の前線にまで至る学習研究の展開、学習研究と企業の組織研究をつなぐ稜線を見いだすことになる。

もう一つ、この論集の中に、「組織のフロンティア」という副題を持つ論文、組織学習の研究の新しい前線を切り開く論文が収められている。この論文、エティエンヌ・ウェンガーの「コミュニティ・オブ・プラクティス」は、学び合うコミュニティの発展過程とそれを支えるコーディネーターの働きについて数多くの事例の分析をもとに分析する組織学習研究のもっとも新しいアプローチの起点となる論稿となっている。14の論文を通じて、学習研究の歴史と現在と将来を、企業の実践と研究を通じてとらえることが出来る論集になっている。(柳沢 昌一)

お知らせ

組織マネジメントと学習をめぐる重要な論稿を集めたこの論文集を読む研究会を、インターネットを活かして、進めたいと構想しています。参加してくださる方は、下記までメールをください。(柳沢 昌一)

yanagisawafukuini@yahoo.co.jp

組織能力の経営論 学び続ける企業のベスト・プラクティス 目次

- 第1章 ナレッジ・クリエイティング・カンパニー（野中郁次郎）
- 第2章 「学習する組織」の実践プロセス（デイビッド・A・ガービン）
- 第3章 「ダブル・ループ学習」とは何か（クリス・アーギリス）
- 第4章 防衛的思考を転換させる学習プロセス（クリス・アーギリス）
- 第5章 学習する組織へのブレーク・スルー（クリス・アーギリス）
- 第6章 ディープ・スマート： 暗黙知の継承（ドロシー・レオナルド， ウォルター・スワップ）
- 第7章 コミュニティ・オブ・プラクティス 知のフロンティア
（エティエンヌ・C・ウェンガー， ウィリアム・M・スナイダー）
- 第8章 T型マネジメント： 知識共有の技術（ボルコ・フォン・オイデンガー， モルテン・T・ハンセン）
- 第9章 エビデンス・マネジメント（ジェフリー・フェッファ， ロバート・T・サットン）
- 第10章 チーム学習を左右するリーダーの条件（エイミー・エドモント 他）
- 第11章 ヴィルトーゾ・チームのつくり方（アンディ・ボイントン）
- 第12章 トヨタ生産方式はこうして再現される（スティーブン・J・スピア）
- 第13章 AAR： アメリカ陸軍の学習法（マリン・ダーリング 他）
- 第14章 組織能力の評価法（デイビッド・ウルリッヒ 他）

学習なくして改革なし

アメリカでは、生産性の高い強靱な組織をつくろうと変革運動がさかんである。それ向けのプログラムも各種開発されており、最新のものを導入しようとするれば、月に一回のペースで更新しなければならないほどだ。

しかし、いずれのプログラムも決定打に欠け、大した効果が得られないのも実態である。その理由は、改善運動に取り組んでいる企業のほとんどにおいて「継続的改善には組織学習へのコミットメントが必要である」という基本中の基本がきちんと理解されていなかからである。

そもそも「学習」なくして、どうして組織の「自己改革」ができれば。問題を解決するにも、商品を開発するにも、リエンジニアリングするにも、まず新しい角度から物事を見直し、それから行動しなければならない。学習を怠るような組織では、個人も因習を繰り返すだけであり、仮に変化を起こすことができたとしても、それは表面的か、あるいは偶然の産物でしかなく、おとずと短命でしかない。

先見のある経営者（中略）は学習と変革プログラムとの関係を承知しており、マネジメントの焦点を組織学習に置いている。第2章 「学習する組織」の実践プロセス（デイビッド・A・ガービン） pp. 39-40

学習する組織のマネジメント

学習する組織は、マネジメントにおいて次の五つに長けていなければならない。

- ①システマチックな問題解決 ②新しい考え方や方法の実験 ③自社の経験や歴史からの学習
- ④他社の経験やベスト・プラクティスからの学習 ⑤迅速かつ効果的な知識の転移

第2章 「学習する組織」の実践プロセス（デイビッド・A・ガービン） p. 46

実践コミュニティの評価

実践コミュニティの評価という難問を解く鍵は、口頭で語られる証言を丹念に集めることにある。一部の話だけ、特に参考になるものだけを集めるというのは無理だ。全体的様子とかけ離れてしまう危険性も高い。複数の話を体系的に整理していけば、実践コミュニティにおける多彩な活動をそっくり把握できるはずだ。

第7章 コミュニティ・オブ・プラクティス 知のフロンティア（エティエンヌ・C・ウェンガー， ウィリアム・M・スナイダー） p. 252

6/6 fri 9:00-16:30

福井大学教育地域科学部附属中学校

第43回教育研究集会

学びを拓く《探究するコミュニティ》(1年次)

ー子どもの学びを見取るー

シンポジウム 生きる力を育む授業をどうデザインするか

秋田喜代美 / 鹿毛雅治

Schedule

- 4/26-27 sat 合同カンファレンス(9:30-17:00)教育地域科学部1号館
- 5/24 sat 合同カンファレンス(9:30-12:30)教育地域科学部1号館(午前は合同、午後は各自で進めます)
- 6/6 fri 附属中学校公開研究集会
- 6/14 sat 附属幼稚園研究集会
- 6/28-29 実践研究福井ラウンドテーブル

[編集後記]

教職大学院 Newsletter 第2号を発刊する運びとなった。第1号に引き続き教職大学院のスタッフ紹介、さらに今号から大学院生の紹介文も掲載した。船出をしたばかりの教職大学院であるが、皆が情熱と確かな意思を持っているように感じられる。初心を忘れず、そして謙虚さを忘れず、教職大学院が実践に根ざした確かな学びを提供できる場であり続けられたら、と思う。

(廣澤 愛子)

教職大学院 Newsletter No.2 β
2008.04.27 発行
2008.04.27 印刷

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会

team2: 森透・佐分利豊・廣澤愛子・柳沢昌一

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp